

京都秋期特別集会

無の実存——マルコ10・17～22

1959年11月9日（京大 楽友会館）

小池辰雄

文化を推進させる力 無善無即無限 十言 私心が「罪」 聖意体现 信行一如 かくせざるを得ない 天鐘 無の神秘的な霊的空間 絶対無条件 天下一品の神品 本日一生 大死は即ち大生 空にして充滿 キリストの本願の効力

【マルコ10・17～22】

17 イエス途に出で給いしに、一人はしり来り跪ずきて問う『善き師よ、永遠の生命を嗣ぐためには、我なにを為すべきか』 18 イエス言い給う『なにゆえ我を善しと言うか、神ひとりの他に善き者なし。 19 誠命は汝が知るところなり「殺す勿れ」「姦淫するなかれ」「盗むなかれ」「偽証を立つるなかれ」欺き取るなかれ「汝の父と母とを敬え」 20 彼いう『師よ、われ幼き時より皆これを守れり』 21 イエス彼に目をとめ、愛しみて言い給う『なんじなお一つを欠く、往きて汝の有てる物を、ことごとく売りて、貧しき者に施せ、さらば財宝を天に得ん。 22 且きたりて我に従え』 22 この言によりて、彼は憂を催し、悲しみつつ去りぬ、大なる資産をもてる故なり。

●文化を推進させる力

根は福音の世界であつて、この諸々の幹枝葉花果は文化の世界です。特に幹は、私はこれは倫理の世界と思いたい。一切の文化の現象は宗教と、その他の政治も経済も学問も科学も全部、人間の営みであるかぎり、そこに倫理性というものが必ずある。これが媒介になっていると思います。しかしながら、その倫理をして倫理たらしめるものは本当の意味における宗教の世界なんです。そこらの新興宗教ではない。高次の宗教です。

実は、人間実存の一番根源の問題、

「宗教は人間の一番大事な関心事である」

とミルトンが言いましたが、そのミルトンの言葉のように、実にあなたの方青年諸君は特に——達磨さんのところへ来た青年のように——この世界を本当につかまなければ、あなた方は将来いろんなことをなさいますが、その無限の展開というものは残念ながらおそらく来ないだろう。向こうのヨーロッパの素晴らしい学問や、また芸術や何かは、大方そういう宗教性の深い人が産み出した場合が多いというのは、これも実証であります。何



もそんな社会的に大きなことをしなくても、人間の实存において、どんなに人の目につまらなく見えるような事柄であろうとも、それが真の価値あることを為しうるには、やはり同じことであります。

そういう意味において、この福音というものは、宗教は決して特殊なことではなくて、最も万人に関わる問題である。福音の問題は万人に関わる。

日本の仏教は驚くべき展開をした。京都、鎌倉で仏教の華は爛熟して、もうその役割は、ある意味において、果たしたと言つてよろしいでしょう。今日もお寺さんを見て来ましたが、けれども、最澄、空海、法然、親鸞、道元、白隠、日蓮と、実に偉大な坊さんたちが現れた。私は本当に尊敬しています。ああいう人たちのものを読むことが私は好きです。そこらのヨーロッパの神学の本を読むよりか、彼らは仏の世界で素晴らしい次元に入っているから、私は教えられる。そういう素晴らしい先輩をもつていながら、仏教にはこの文化を強く推進させる積極的な力が、おそらく足りないのではないかと思います。

しかしながら、仏教的思维の中には大事なものがあるから、私は善きものは何でも取り入れようと思う。ゲテという人は東西を融合せんとするような大きな魂でありました。真理の真理はキリストであります、およそ真理は虚心坦懐にこれを受けとつていくことができなくてはならないわけです。

文化を本当に推進させるところのものとして、キリスト教というものにとにかく——それがさせるかどうかは知りませんが——皆さん、一つ当たつてみたらいい。もう他にどこにもないと思つたら、これにぶつかつていく。体当たりしてみる。私はこんなダメな男ですけれども、とにかく、これに入つてみたら——ちょうどあなた方と同じ20歳のときから私はとにかくこの道に入りましたけれども、もう35年たったかな——いよいよもつて、この世界が本当であることを、私は死に至るまで証言せざるを得ない。ざるを得ないんです。そういうものをこのキリスト道は持つているということを、今晚、お話したい。

●無善

そこで、先程、マルコ伝10章のところを読みましたが、キリストは幼児の無心ということと言われた。ちよつとここに「無」の字を書いておきましょう。そのあとにこういうことが書いてある。

17 イエス途に出で給いしに、

これはエルサレムの方に向かつて行く途上ですけれども、一人の青年が、

一人はしり来り跪ずきて問う『善き師よ、永遠の生命を嗣ぐためには、我な

にを為すべきか』

「善き先生、永遠の生命をつぐためには私は何をしたらいいですか」と。

18 イエス言い給う『なにゆえ我を善しと言うか、神ひとりの他に善き者なし。』



この青年の問はいいんですよ。

「永遠の生命をつぐために我は何を為すべきであるか」

と、行為の問題で問うてきた。これがギリシャの青年だったら、

「いかに究めたらいいか、知つたらいいか」

と言って聞くでしょう。これは学問科学の、知の世界で貢献したギリシャ人だから。ところが、ヘブライ人は、ユダヤ人は実践の世界、実存の世界。これはカントの「実践理性」の世界です。ギリシャ人の方は「純粋理性」の方です。「実践理性」の世界でユダヤ人は、「永遠の生命をつぐためには何をしたらいいか」という、この問は大変結構なんです。ただし、その枕詞がいかん。

「善き先生」

と言ったから。それでキリストは、

「なぜ、私のことを善いと言うか」

と。これはみんないい加減にしているけれども、私はこのキリストの言葉にぶつかったときに、ぐっと来た。彼は無善です。善というならば、キリストは善の善なる人である。ところが、彼は自分を決して善きとは思っていない。もちろん、彼は善きことを自覚していらつしやったでしょう。けれども、彼は自分の善を決して私しない。

ここに私が今書いた「無」の字の意味がだんだんあなた方に説明されてきたと思います。無私である。善は神のものである。即ち、

「みんなが私のことを善いなんて言つたって、それは知らんよ。私の中で善きものが現れているのは、それは神の善がそこに現象している」

と。キリストは神の善の体現者であるにすぎない。身をもつて現じている者であるにすぎないのであつて、彼はそれを私しない。私したらばキリストは行き詰まる。ナザレのイエスといえども、善を私したら行き詰まる。即ち、彼は無善の善です。親鸞が「無義の義」と言つたでしょ。あの親鸞という人の信仰を、『歎異抄』なんかを読むと、あの浄土真宗というのはまるで福音の解明みたいだ。

ここにも東本願寺、西本願寺という大きな寺がある。あなた方はこの素晴らしい京都にいて、宗教の世界に深く入らなかつたらもつたないですよ。私は今度、京都に来て、今日で五日目になるけれども、実にいい都ですね。ゆつたりしていて。東京から来ると、本当に何か休まるような気持です。お寺さんは偉大な建物ですね。しかし、寺の前に立つて、あなたの方がその寺よりも、自分が即ち本当の寺になつたら、本当に寺を見ていることになる。寺に吞まれてはダメです。

その無善の善、無義の義。さつき読んでいただいたところにも、

「私は何もできない」

とあつた。キリストは万能かと思つたら無能者である。それで安心したという。キリストは、



「私は何もできない。無能である。私は何も教えることができない。わが教えは神の言い給うことを言っているにすぎない」

と。ヨハネ伝の7章あたりに出ている。キリストは無教なんです。キリストは自分でもって、「キリスト教」なんていうことは一言も言わんですよ。

●無即無限

「ゼロ＝無限大」

というのが即ち、キリストは自分を無と本当にしていましたら、無即無限というすがたになつてきた。神という無限が即ち、無即無限ということなんです。だから、キリストがまた別なところで、

「我を見し者は父を見しなり。私を見た者は神さまを見たんだよ」

と言われた。これは神の子でなければ、気違いかどつちかです。即ち、

「我を見し者は父を見しなり」

と言えた彼は、「我」というその我は絶対に私しされた我ではない。完全に神の中に自分を没入している。幼児の心で神の中に入る。だから、幼児の心になったら

「神の国を受ける」

と言っている。キリストはこの場合、「信ずる」なんてな言葉で言わない。

「幼児の如くならずば、神の国を受けることができない。その中に入ることができない」

と言っている。

一般に「信仰」ということを非常に「信念」だと思っている。だから、信仰生活を何年やつても同じことで、しまいにくたびれて、

「ああ、もう、よそうよそう」

なんてなことになってしまう。始めは大いに信仰は勢いがいいですよ。始めはまるでジェット機みたいに昇っていくけれども、終いにくたびれてしまつて、放物線で落っこちてしまふ。ところが、

「私は自分なんていうものを当てにしません。本当に無です」

と言って自分を投げ出していると、逆にカーブが天上に向かって進んでいく。皆さん、このカーブの人にならなければダメです。自分を先ず投ずるんです。皆さんはどこにいるか知らんけれども。

仏教の言葉に、

「百尺竿頭かんとうなお一步」

という言葉が『無門関』の中にある。百尺の竿の上に立って、さあその先はどうしたらよからうと。なお一步を進めると、その前進は十方世界に現前するという。即ち、ここから



——あなた方は百尺の上になくたつて、どこだつていいですが——今いる所から、自分を本当に投げ身する。投身する。自殺ではない。

「本当にもう自分なんか問題じゃない」

と言つて、この素晴らしい福音の世界に、聖書の世界に自分の身を投げ身してごらん下さい。そうしたら、これは逆カーブに進んでいくから。ところが、「私の信仰は」と言つて、一生懸命で大事にして、

「信仰を厚くしよう、強くしよう」

なんてやっている、くたびれてしまつて、放物線で落ちてしまふ。

これが無の呼吸なんです。それでは、私はそんな素晴らしい無の世界にありますか。私は決してそんなことは言いません。私は自分が無だとか、そんなことは決して申しません。私はダメのカスであります。その消息を今、このマルコ伝のこここのところに従つて、つかみたいと思う。

●十言

まず、とにかく、

「私を善いと言つてはいかん」

とキリストは決めつけましてから、

19 ^{いましめ}誠命は汝が知るところなり「殺す勿^{なか}れ」「姦淫するなかれ」「盗むなかれ」「偽証を立てるなかれ」欺き取るなかれ「汝の父と母とを敬え」

と。「モーセの十誡」という映画を皆さんは見ましたか。あの「十誡」という映画に出てくるでしょ、あの妙な文字が。あれはヘブライ語なんだ。この十誡の話をしだしたら、また一時間も二時間もたつから詳しく言うのはやめますけれども。ちよつと申しますと、

「汝、わが顔の前に何もものをも神とすべからず」

というのが第一誡です。イスラエルの民に向かつて「汝」と言う。モーセに現れた神さまが与えた十の誡め——あれは本当は「誡」ではない——原語では十言です。十の言葉なんです。

「他の民族には神々があるよ、

あれは一神教でも、唯一神教でも何でもありません。

他にも神さまはあるだろう。けれども、汝は私の他に何も神にしてはいかん。イ

スラエルの神ヤーヴェーなる私とお前とは一対一の関係である」

と。これを人格関係という。それは、しかし、もうひとつ言いますと、あの言葉は、

「汝にとつてはわが顔の前には神々はない」

という断定の言葉です。「すべからず」ではない。汝にとつてはわが顔の前には神々はない。無きに等しいというわけだ。理論的でないというのではない。実践的に実存的にないとい



うことです。

また、そこに「殺すなかれ」とある。

「汝、殺すなかれ。汝は殺人してはいけない」

とかいう。けれども、あのヘブライ語の否定詞は「ロー」という字でして、「汝は殺さず」ということです。

「お前は殺さない。汝は殺人はしない」

と。断定しているんです、あの十誡の根本精神は。その断定から、「殺人はするな」という戒めに展開はするから、誤訳とは言わなくても、一番大事な断定的な訳をルターさんもやらなかった。私は惜しかったなあと思うんですが。私はルターの訳は好きですけども。あなた方に

「君たちは勉強するね」

と言うと、怠けていたら、

「いやこれは少しやらなくてはいいかな」

と思う。それを

「勉強せよ！」

なんて言うと、

「少し怠けてやれ」

なんて思う（笑）。これはパウロが言っているとおおり、

「律法は罪を刺激する」

ところが、福音は罪を刺激しない。

神さまはイスラエルの民に信じかかっているんです。

「私がお前の神だもの、お前は殺人なんかしつこないねえ」

と、信じ愛している言葉なんです。信愛の言葉です。友人をそのように信じてごらん下さい。少し「あの野郎」なんて思っているのが、今度は逆に

「ああ、そんなに俺を信じてくれたか。悪かったな」

と言って、その人は逆に変えられる。相手を信じぬいていくこと。

神の信がイスラエルの歴史を貫いているんです。だから、素晴らしい。イスラエルの民は頑（かたくな）な、うなじこわき民である。うなじこわき、頑固な、駄々っ子のしょうがないやつだと。全く今でもユダヤ人はそういう面がありますね。なかなか頑強ですよ。そいつを神さまはとつかまえて、そして、こいつを本当に救い上げれば、そこから全世界に救いを伸ばしていく。

日本人は一番善良だから、キリスト教は一番後になつたらしい。

「まあ、まあ、あれはいいから、一番後でよろしい」

と（笑）。だから、日本人は実は一番優秀な美わしい民なんだ、正直。せっかく、そういう



優秀な美しい性格をいただいているんですから、これを本ものにすべく、この二十世紀の最後で「今こそ福音を受けろ」という期^{とき}がみちている。日本は一遍ひっくり返ったでしょ。本当に福音を受けるときが満ちて——あのときに「一億総懺悔」なんて言いましたけれども、一向に空念仏で総懺悔してない——あのときに総懺悔したら、今ごろはどんなに素晴らしい日本だか。世界はまばゆくて見えやしないです、日本人が。

そういうようなわけで、今は本当に大事なときなんです。日本は世界に何をもって貢献するか。最後にこの偉大なる宗教をつかまえて、そこから本当の文化を展開していく。なぜ、そこに本当に徹しないで、毎朝、毎週、毎晩、パチンコなんかはじいているか、というわけです。津々浦々パチンコだらけ。ああいうものは亡国の徴です。

そういうわけで、神さまがイスラエルに信じかかっている。これが実はモーセの十誡の根本精神であることを一言、皆さんに申し上げておきたかった。パウロが「律法と福音」ということを盛んに言ってますが、イスラエルの歴史は悲劇にも、律法の奥に隠されているところのこの福音というものをつかみそこなってしまった。このつかみそこないを本当に、律法の奥を見抜いてつかんだのが実は、ナザレのイエス・キリスト、彼だけであつた。

●私心が「罪」

ところが、この青年は品行方正、学術優等らしいので、「私は幼いときからそれを守ってきました」と言う。

²⁰ 彼いう『師よ、われ幼き時より皆これを守れり』

キリストはその青年を見て、「うむ、よく守ってきた。お前はいい子だよ」と。

²¹ イエス彼に目をとめ、愛^{いとく}してみて言い給う

と書いてある。だから、本当にその青年は善良な青年でね、一応よく守っている。けれども、

『なんじなお一つを欠く、

「お前に一つ一つ欠けていることがある」と言われた。

往きて汝^もの有^もてる物を、ことごとく売^うりて、貧しき者に施^たせ、さらば財宝^{たから}を天に得^{かつ}ん。且^{かつ}きたりて我に従え』

と。この青年は金持ちの青年なんです。アルバイトなんかしなくて済んでいる。これはお金が大事なんだな。キリストはその人が持っている一番大事なものを捨てろと、かかってくる。ちよつと無理なことですね。その青年は金持ちだから、その資産を「ことごとく売^うりて」と言う。即ち、

「お前は無金になれ。無財になれ」

と。ところが、青年はそれが惜しくてしょうがないものだから、

²² この言によりて、彼は憂^{うれい}を催し、悲しみつつ去りぬ、大なる資産をもてる



故なり。

と。

「私はそんな金がないから、大丈夫だ」

なんて、そう思う人があるかもしれませんが、しかし、あなたの方の中には、頭の優れた人がいるでしょ。知能が非常に優れていて、クラスの一番なんてのがあある。そうすると、キリストは、

「その学問を捨てよ」

と言われる。ランニングのチャンピオンだというと、

「その足を捨てろ。その駿足を捨てよ」

と。何でもその人が持っている一番の長所を、一番これはと思うものを捨てよと言う。そうすると、なかには威勢のいいのがいて、

「では、捨てます」

と言つて一遍捨てるけれども、また惜しくなったりなんかする。それではダメです。この青年も、大いに気合をかけて一遍捨てても、

「ああ、惜しかったな」

なんて思ったら、それはダメですよ。

結局、それは何かというと、そこにおいて惜しまれているものは実は、「我」が惜しまれている。金を惜しんでいるのではない。金を持っている主体である、この我というものが惜しまれている。ここが、さっき言った「キリストの無我」になつていないことなんです。学問を私している。健康を私している。財を私している。その私心は、わたしにくころそれがどんなに素晴らしいものであつても、どんなに尊いものであつても、この私心をもっているかぎり、それを「罪」という。

●聖意体現

「イエス・キリストの一生はどういう一生でしたか」

と問われたら、私は一言のもとに答える。即ち、

『汝の御意をなされたまへ』という彼の祈りにその全生涯がかかっている」

と。この「我」の問題からそこに今来るわけですよ。

カントは、人間の主体は意志的存在であると言つた。また、理性的存在でもあるが、それは実践理性の世界だから、意志、善意志です。道徳哲学の本としては、カントの『実践理性批判』は千古の名著ですね。ところが、その意志というものは、「意志の自律」ということをカントは言つたけれども、この意志の自律というのは、それは理論の上ではそうであつても、実践の上では私たちは真に自律を実行してはいない。

「真に道徳に対して畏敬の念をもつてこれを実践せよ」



というカントの無上命令を本当に実践している人は一人もない。誰もいなくても、それは人間のあるべき「ゾレン」（すべし）の姿であると言ったところに、カントの道徳哲学の尊さがありますけれども。

その意志を、キリストは

「汝の意志が成るように」

と言って、「汝の意志」をプラスとしまして、「自分の意志」に「非ず」と言って、自分の意志をマイナスにした。汝を「然り^{しか}」と言って、我を「否^{いな}」と言っているのがキリストの姿なんです。

だから、「善き先生」と呼ばれたら、

「なぜ、私を善いと言うか。神だけが善いんだ」

と。神の言である、神の行である、神の善である、神の愛であると言う。

物理の世界でも、プラスとマイナスはもの凄く放電するではないですか。上からバーツと電流がくる雷はいいもんですよ。これはあの雷鳴、稲妻のごとき事態です。ベートーヴェンの音楽を聞いていると、そういう消息があるね、第六シンフォニーあたりは。非常に気合がかかっている。

神をプラスとしたから、彼は自分を否と言った。そうしたらば、この神の意志は、

「汝の意志をなさせたまえ」

というキリストの言葉の中にキリストはひとつ隠してある。「我を通して」ということを。

「汝の意志を我に在りて為させよ、成らしめよ」

と。この「我に在りて、我を通して」ということを読まないとダメです。あの祈りをクリスチャンが、

「御意の天になるごとく地にも成らせたまえ」

なんて傍観的に祈っていたって、それはダメですよ。それはむしがいい。諦めみたいだね。それでは、「主の祈り」なんていうものは死んでしまつて、主の祈り自身が十字架にかかつてしまふ。

「我を通して」また「我がうちに」と言うことが、あのキリストの祈りですから、これはさっき言った棄身の祈りなんです。自分を神の前に投げ出していなければ、「汝の意志をなさせたまえ」という祈りは祈りにならない。

そこが即ち、「体当たり」ということなんです。そうしたらば、この彼において神の意志がなっていくから、どうですか。神の聖なる意志が、聖意がキリストにおいて体现しているではないですか。「聖意体现」という事態であります。この聖意体现です。

● 信行一如

皆さん、この福音書にぶつかって、福音書をお読みになって、驚くべきキリストの言葉



とその行にぶつかって、

「ああ、キリストは宗教的天才である」

なんて思ったってダメですよ。天才でも何でもありはしない。キリストはただ、全く自分を神の前に無にして、そして、動いていたから、このような驚くべき事態が現象している。だから、

「我を見し者は父を見しなり」

と言ったんです。この聖意体现という事態が、これが本当の信の世界です。信とはかくのごとき信行一如です。神を信ずるとは神の中に自己を投ずることで、内的行、内的行為なんです。信仰とは内的行為である。即ち、信行一如と私が申すのはその意味であって、「信仰と行為」を、いわゆる現象的な行為を私は言っているのではない。現象的な行為はそれから自然に派生してくるんです。信が即、行なんです。信即行ということですから、

ゲーテが『ファウスト』の中でヨハネ伝第1章1節をファウストをして言わしめている。

「初めに言ありき」

と、ルターさんは訳したけれども、どうも「言」では自分は満足しないという。そして、その次に、

「初めに意ありき」

と訳した。まだいかん。

「初めに力があつた」

と。だいたいいいけれども、まだ落ち着かない。そして最後に、霊に感じて、

「初めに行為ありき」

と訳して、気がおさまったとある。即ち、言、意、力、行。この四つの言葉で表現して、最後に「行」と来ている。これは実は、渾然一如なんです、私に言わせれば。即ち、

「神、初めに『光あれ』と言ひ給ひければ、光ありき」

という。神においては言行一如です。ズレがない。キリストの実存を見ると、これはズレがない。言行一如です。全く言行一如です。だから、聖意が完全に体现しているから、天的意志が、天的法則が完全に体现してますから、これを自由という。これを本当の自由という。今は、「自由、自由、自由」なんて言ったって、そこらの自由は本当の自由ではない。皆さん、「自由」と言うなら、この自由をつかまえなかったら、自由ではない。何かに囚われている。捕らわれるなら、この神の意志に捕らわれるのでなければ、本当の自由ではない。神の絶対なる意志に捕らわれるから、真に自由である。天的必然が即ち自由である。必然が即ち自由である。

●かくせざるを得ない

皆さん、この自然界を見てどうですか。ああ、京都の山はいいなあ。あの枝振りはいいいなあ。



と。これはみな物理法則で、必然的な法則ですべてが動いているでしょ。物理の必然の世界を天然自然と言うではないですか。物理の必然の世界を天然自然というならば、人間の世界も、神の真理によって動いているときに、それを真に自由という。その自由は、自分が「あれか、これか」と言つて、キルケゴールみたいに選択するのではない。「せざるを得ない」と、ルターがああヴォルムスで言つたように、

「私はかくせざるを得ない」

という世界です。あれは西郷南洲も大好きな言葉です。南洲はルターを知っていたのではない。南洲はあの佐藤一斎（1772～1859）の『言志録』でそのことを知つた。

「雲煙は已むを得ざるに聚り、

風雨は已むを得ざるに洩れ、

雷霆は已むを得ざるに震ふ、

是に以て至誠の作用を觀る可し」

という。その已むに已まれざるところに至誠ありという。「かくせざるを得ない」という動き方が一番強い動き方なんです。

「これでもない、あれでもない」

というのがニヒリズムだ。

「これでもよし、あれでもよし」

というのは平俗な楽天主義。

「あれか、これか」

は、まだ倫理の世界で苦しんでいる。

「どつちでもない」

というのは、これは少し捨て鉢でもつてニヒリズムで危ない。ところが最後に、この

「せざるを得ない」

と言つて神の法則に乗つかつていくのが本当の在り方です。これがキリストの無的実存であります。キリストはそうだった。しかし、私たちは一体どうしたらよいか。

●天鐘

もうじき暮れになりますと、除夜の鐘が鳴る。あの除夜の鐘を聞きながら、私は瞑想した。梵鐘というのは——西洋の鐘には中にベルがある。ガラン、ガランと鳴る——ところが、東洋の梵鐘にはベルはない。撞木で撞く。鐘は上から吊るされているが、落ちると危ないといつて、もし下に足場（架台）をかけたなら、どうなるか。鳴りますか。鳴らないでしょ。この足場をぬいてある。中空にぶらさがっている。この姿に私は驚いた。

普通の宗教の世界は、セクシヨナリズムが横行している。何々宗派とか、何々主義とか。私も無教会主義という内村鑑三先生の流れに育った者ですが。主義主張、教派、信条、い



ろいろなものを立てています。それを私は必ずしも悪いとは言わない。けれども、私はある時から、無主義、無主張、無立場になつてしまった。そしたら、「お前はクラゲみたい」にフラフラしているか」と。決して然らず。ここにちゃんと天から吊り下がっている。これは、頭場を持つている。足場ではなくて（笑）。地界でもつてやつていっているのではなくて、上から吊るされている。そして、鐘の中は何もない。何もないが、それでは二ヒリズムの虚無かという、決して然らず。ここには天空が入っている。天空がこの中に入っている。この天空にいだかれながら、天空を宿している姿です。いいですか。この天空に懷かれながら天空を宿して、ゴッソんと打てば、鳴るものは鐘か天かというわけです。天が鳴るのか、鐘が鳴るのか。それから、私は自分の号を「天鐘」と名づけた。

私は現実に「天鐘」と言っているような人間になりすましているとは決して申しません。私の悲願は——私は仏教の言葉が好きだから、これを福音の世界でいくらでも使いますよ——この天鐘一如の、このキリストの本願に即せんとするところにある。

ここに本願寺というのがあるではないですか。日本人は外来のキリスト教のまねをしているから、いつまでたつても本当の掴み方ができない。この東洋には大事なものがある。それを私たちがなぜ活かさないか。そして、東西打って一丸にしないか。日本人はどこまでも日本人でいよいよなければダメです。ルターはドイツ人です、ゲートルはドイツ人です。シェークスピアはイギリス人。夏目漱石さんは日本人。その特殊性において貫いた普遍的なものを表すかどうかが問題なんです。

芭蕉の俳句なんてものは、よその人にはちよつと分かりますよね。芭蕉の、

「古池やかわず飛び込む水の音」

というあの一句は禅の悟りからきた一句です。それはもう、その世界からしみ出ていると、何も宗教臭くなくて真に神品ができるわけです、本当にうちに溶けていれば。私は宗教臭い人間は、実のところ嫌いなんだ。臭いのはいやですよ。だから、無色透明になりたい。無にいいよになりたい。

皆さん、空気が見えますか。空気は無色ですよ。太陽の光が見えますか。それはある時は、太陽の光はちよつと見えるような場合もあるけれども、太陽の光も無色である。空気も無色である。水も無色である。私は、空気と光と水は大好きなんです。その無色の世界。皆さんの目玉は色がありますか。ないでしょ。水晶体は無色だから、太陽の光でものを見るときは、本当に物の色や形が無色によつて認識できるんですよ。ところが、世界で人間の心が無色の無心になつていない、有心になつていいるから、すべての狂いがきてしまう。

この無の世界というものは何と素晴らしいか。物理の世界でも原子構造で——私はよく知らんけれども——原子核といろんな粒子があるね、素粒子みたいなものが。あれがグルグル回っている空間というものは、比例にすると、もの凄い大きなものでしょ。その無的な空間において驚くべき力が働いているでしょ。



そのような具合に、無でありながら、ここは充滿している。天が充滿している。キリストはそのような梵鐘的な存在であった。だから、彼は本当に鳴り響いていたんです。

●無の神秘的な靈的空間

それで、この青年はどういう仕方なしに、「私は…」と言って、そのお金が惜しくて逃げて行ってしまった。これは即ち、彼が有心である。己というものを持っているから、無心になれない。ここに、福音の大事な消息がこれから展開する。

私は実に慘憺たる人間ですよ。この慘憺たる、どうにもそれ自体は救いようのない、濟度し難き者ですよ。自分で無になろうとしたって——それは禅宗の坊さんみたいに、なれる人もあるかもしれないけれども——それも或る相対性でしょ。ところが、この私の中を無にしてくださった人がある。言うまでもなく、それはキリストである。

どうして、私の中を無にしてくれたか。それは彼の十字架である。パウロが、

「われキリストと偕に十字架につけられたり。もはや、われ生くるにあらず。」

キリストわがうちに在りて生き給うなり」

と、ガラテヤ書2章20節で告白している。即ち、この十字架は、この私が神さまの意志に直結できないダメなやつ——神人合一なんて、そんなことはとんでもない話だ——このダメなやつに、

「よし、お前はもう心配いらんよ。私の十字架を見てみる。十字架の我を見よ」と呼びかけてくる。

「彼らは為すところを知らず。赦してやってください」

というのがキリストの十字架上の祈りです。キリストは傍観して祈っているのではない。彼は自分の生命を捨てて、そして、敵とされて十字架につけられて、釘付けにされて血潮を流して、息を引きとるその苦しみただ中において、「彼らを赦せ」という身をもつてするところの、身を与えているところの、この天来の愛——ギリシャ語で「アガペー」という——この愛が、十字架の贖いの愛が、私を完全に私の中を無にしてくださった。

あいかわらず、私は無ではありませんよ。けれども、私の中に、無のひとつ神秘的な空間ができた。靈的空間が私の中にこの十字架で。そうしたら、キリストはこの無の空間を決して——物理の世界も、「真空を嫌う」と言うけれども——真空にはしておかないんです。キリストは、

「せつかくこの無にしたところに私は入って行くんだ」

というのが、既に地上にあったキリストが約束されたことです。

「私は、今お前たちと本当に一つになりたいんだけど、なれない。わが受くべきバプテスマがある」

と。この「バプテスマ」と言ったのは十字架のことです。そして、



「そうしたらば、私は今度は、お前たちのところにまた来るぞ。孤児にしないぞ。みなしご私はお前の中に入ってくるぞ。宿るぞ」

と言われた。

これは復活したキリストのあの驚くべき生命が、

「我は生命なり」

というこの生命が天界から霊として、霊生として、霊の生命として入ってくる。この十字架において、私の中にできたところの真空体に、キリストの霊が宿った。結核患者なら結核が宿ったように、これは霊核が宿る。

だから、私は病院で結核の人にお話して、

「ご心配はいりませんよ。あなたは本当にキリストの根源生命を受けてみなさい。

この霊核が必ず勝つから」

と言う。正直、私の集会には、それで勝って、療養所をさっさと引き上げてきたのが幾人もいます。これは本当です。もちろん、私はお医者さんや薬をけなすようなものではありません。何でもみな受くべきものは受けます。けれども、根源の生命を与えるものは医者ではない。根源の生命を与えるものは、この根源の生命の所有者である神・キリストである。これは悟りの世界とは違っています。

●絶対無条件

その生命が来たから、私は「マイナス99」というダメな男だけれども、ここに「1」が来ましたから、この1が必ずマイナス99をやっつける。これは数学だと、マイナス98だけれども、そうじゃない。この「1」は質が違う。この1がだんだん大きくなって、そして真に天鐘のごとく無にしてくれる。いつ無になるか知らんけれども、私はとにかく、この無即全ですよ。その時に、

「キリストの姿に化するなり」

とパウロが言った事態です。それが私の悲願です。しかしながら、私の悲願は、キリストの本願がちゃんここに入っているから、必ず悲願は成る。これが救いの確かさと言うんです。私の「自分の信仰」とか、そんなことを言っているのではない。私は、自分の主義も、主張も、信仰も、そんなものは全部はずした絶対の信です。信仰に絶するところの信です。信仰の事態も私したらダメです。

この信仰の世界は、何も条件はいらんですよ。皆さんは、何かむずかしいことと思つたら、とんでもない間違いです。絶対無条件、あるがままそのままで結構です。何もとりすぎないでいい。私は、構えたり、臭みがあつたりするのは嫌いです。どうか、皆さん、もう、あるがままに。

「あつ、そうでしたか。私はそんなにもう救われていたんですか。はい」



と、それだけです、問題は。これを幼児の心おさなこというんです。

だから、仏教の世界でも、本当に「南無妙法蓮華經」ならば、また本当に「南無阿弥陀仏」ならば、

「南無と言えば仏来にけりこの一つ身を我とは言わん仏とは言わん」

という。南無と言えば、阿弥陀さんがやって来て、この一つ身を我と言おうか仏と言おうか、という歌があるじゃないですか。本当に南無阿弥陀仏と称えれば、悪魔なんかどこかへ行ってしまう。仏教の世界でも、本当の世界はそうです。この福音の世界において、ましてや然らん。何か条件付きのものは決して最後のものではない。

「私はどうも宗教的ではありません」

なんて、何を言っているか。宗教的もへつたくれもありはしない。皆さん、この自然的生命にとって一番大事なものは何かというと、空気ではないですか。皆さんは無意識に空気を吸っているでしょ。寝ていても空気を吸っている。これは絶対無条件に無価値で吸っている。この机の上にダイヤモンドがあるとしたら、この部屋の空気よりかダイヤモンドの方がいいと言ってダイヤモンドを取る人は死ぬ。けれども、この部屋の空気をもらった人は生きる。即ち、驚くべき価値を持っているダイヤモンドは、実は生命の糧にはならん。自然的生命にとっては、全然無価値のこの空気は無価値を持っている。

その如く、魂の世界で無限の価値を持つものは、万人に絶対無条件に受けとられるところのものです。これがやはり親鸞が展開したところの仏教でもあったし、また、日蓮の「南無妙法蓮華經」でもあったでしょう。彼らの志しているところの質は同様な質なんです。

それでありまして、いわんや、実質が驚くべき生命を持った、永遠の生命をもった、このキリスト。これを受けとる。これが

「私を受けとりなさい。さあ、来たれ」

というのがこの十字架ではないですか。彼はもう救いを完了している。私の過去も現在も未来も完全に救われている。問題はそこから出発する。そこが出发点です。

あのジェット機みたいに推進力がかかっている。だから、滑って転んで倒れても躓いても、前進あるのみです。私は後退を知らん。自分を見たら、後退しますよ。自分を当てにしたら、ダメなんだ。けれども、私はもう自分なんてものは、そんな意味において、もう相手にしないから。前進あるのみ。だから、楽でしょうがない。主義も主張も何もない。そうしたら、不思議なことが起きたりする。私は、現象は言いたくないけれども。

●天下一品の神品

そういうわけで、キリストの弟子たちはみなそのような次元に入って行った。人間の器は、神さまは大小いろいろにお造りになるから、「ああ、あいつは大きなやつだ」なんて、羨む必要はない。人間の身体がみんな目玉だったらどうしますか。手か足がなかったら、そ



れは化け物だな。みんな、手もあり、足もあり、目玉もあり、鼻もありというので、これは渾然たる有機体として生命体です。我々この人類共同体というものは、それぞれのつぴきならない役割をみんな持っている。ただ、その部分部分において十全に根源なるものが発現しているか。本当の目か、本当の耳か、本当の鼻か、本当の手か、ということだけが問題です。だから、私は決して主義主張をしない。自分の立場なんてものを、そんなことは主張しない。

それで楽になってしまった。そして、そこにおいて本当ののつぴきならない特殊性というものが現れてくる。皆さんは、一人びとりが天下一品の神品である。「そうですか」じゃない。本当ですよ。皆さん一人びとりは、

「もし、この生命を失わば、全世界を得るとも何の益あらん」

とキリストが言われた。人ひとりの存在をキリストはそれだけ無限的な価値をもって顧みていた。それがどんなに人の目に小さく見えようとも。日本人の考え方に落ち着きがないというのは、そういうところなんです。

日本の受験教育を見て、ドイツ人が「恐ろしい」と言う。ドイツではちゃんと、国のどれくらいの人たちが大学へ行つて、あとはどういうところへ行つてと、有機体的に構造ができています。こんな受験難をいつまでもやっていて、日本はどうなるんですか。受験難と就職難で、青年の君たちは気の毒でしょうがない。いろいろな問題がからまっているから、そう簡単にはいかないでしょう。しかし、日本人の根本的な考え方を本当にこの福音によって変えて、驚くべき有機体的な考え方をしていかなければ。生命体です。組織体ではない。生命的有機体です。そうしていけば、日本の将来は実に素晴らしいことになる。と本当に夢をみたいですよ。ところが残念ながら、この福音だけは、一番大事なものだけは、

「まあ、それはやめておこう」

と言って、みんな逃げていく。

しかし、今晚はよくこれだけ集まったです。あなた方、これだけの方々が本当に——いい加減な信仰なんてものはよした方がいい。おおいにこの世的に生きてください。けれども——本ものの中に入ったならば、

「我一切の秘訣を得たり」

とパウロが言いましたが、そういうクリスチャンとなる。キルケゴールが

「天才よりもクリスチャンは少ない」

と言った。しかしながらキリスト者は一番多くなり得る可能性を持っている。万人に開かれている。キリストは万人救済の本願を持っている。誰も除外しない。どんな悪人をも。

あの十字架にかかった盗賊の一人が、

「私は生涯、悪かったです。あなたは何も悪いことをしないのに、十字架にかかってお気の毒です」



と言った。もう一人の奴は、

「あなたは神の子なら、私たちをどうか奇蹟をもつて十字架から下ろしてくれ」

と。けれども、片一方のさっきの盗賊は、

「どうか、聖国にお入りになる時に、せめても私を覚えてください」

と、本当に心砕けて、マイナス99の人生を送ってきた男が最後の瞬間において、キリストにかく心砕けて言ったら、

「汝、我と共に今日、パラダイスに在るべし」

と言われた。キリストという人は、本当の魂の閃きに向かつては、ウワーツと強く掴みかかってくる。そして、福音の世界とは、最後の瞬間でも――

「それでは、俺は最後の瞬間に悔改めよう」

なんていうのはダメです――とにかく、何時であつても遅いことはない。

大抵の人は信仰に入ると、何か考えが狭くなると思つてゐる。冗談じゃない。私はこの福音の世界に入ったら、もう実に広々としてしまった。仏教でも何でも、およそ偽りならざるものは何でも学びます。決してこだわりません。そして、そこにある真理を本当に掴むことができる。何となれば、この天界の驚くべき無色透明の光で見えるからです。私の信仰の目でなんか見てやしない。

●本日一生

偉大なるゲエテといえども、私は、『ファウスト』を正直、人の読めないことが読めてきそうです。私は、ゲエテという人がある角度から好きなんです。あの人はとらわれない人だから。やはり非常に心の無心な人だ。なぜ、ゲエテの文学が素晴らしいかというと、ゲエテという人は、その意味において、本当に投げ出されている心です。ゲエテは、太陽が中天に来た時に、12時が鳴った時に生まれたと自叙伝のまっ先に書いてある。即ち、

「時計の短針も長針も天を指した時に自分は生まれた。私は太陽の子である」

と言う。それで、その『ファウスト』の始めに、一番先に何という言葉で始まっているかというところ、

「太陽は昔ながらの響きで動いている、鳴り響いている」

と書いてある。そこで、私はこの『ファウスト』を読んで、ある時、インスピレーションが来た。『ファウスト』の最後に何と書いてあるかというと、

「永遠に女性的なるものが我らを引き行く」

という有名な句です。それはもちろんそれでいいんですよ。けれども、せっかく太陽という言葉で始まっているから、私は太陽という言葉で終わらせてやりたいという閃きがきて、一体どこへ、その永遠に女性的なるものが我々を引き行くのか。そこで、

「愛と歓喜をもつて神聖なる太陽へ」



と私は付け加えた。ゲーテさんは苦笑しているでしょうね、あの偉大な詩の最後に二行付け加えたから。「愛と歓喜をもつて、神聖なる太陽へと我らを引き行く」のである。神聖なる太陽とは神です。本当は、ゲーテはこのところに来たら、私は良かったと思うんですが。まあ、しかし、そこを残したところにゲーテのよさがあるのかも知れませんが。

人間はあまり完成したらいかんそうですから。左甚五郎の建てた知恩院の屋根の上に瓦が二枚乗っかけている。あまりよくできたからこれは魔が差すというので、未完成の印に瓦が二枚乗っけてあった。人間は地上では未完成がいいですよ。ご心配はいらん。未完成の完成。未完成交響楽という。ベートーヴェンも第十シンフォニーを書こうと思ったけれども、第九でお終いになったところが良かったんでしょね。

いつ死んでもいい。いつ死んでもアーメン・ハレルヤです。それは何となれば、私の人生はどこで終わるか、明日死ぬかもしれませんが、弧がありますが——これはブラウニングが言った有名な言葉です——この地上の「アーク」（弧）はやがて「ラウンド」（円）になる。このアークの中に円現するところの——「円現」というのはいい言葉です、仏教の言葉です——円現するところの質があるかどうか問題なんです。この弧の長さがどれくらいかなんて、そんなものをいくら量的に計ったってダメです。彼はあれだけの仕事をしただとか、何年生きたかとか、そうじゃない。どんなに短い弧でも、弧の中に無限性、完全性というものが入っているかが問題です。これがさっき言った、天来のキリストという、霊核が来ているかどうかにかかってくる。そうしたら、その弧は、その人の学問であろうと、芸術であろうと、事業であろうと、それは本当に神の国において円現する祝福を受ける。

皆さん、そういうことになったら、人生の本当の落ち着きと本当の迫力が出てくる。一日即ち一生である。内村鑑三先生が「一日一生」と言ったけれども、本日即ち一生であります。「一日」と言って客観的に言っているのではない。この「今日」です。私は、今日ここで、皆さんと話しながら、ぶっ倒れたって本望ですよ、正直。

●大死は即ち大生

そういうようなのが、キリストから賜る無即無限という事態であります。この中には驚くべきエネルギーや知恵や活力が出てくる。こんな貧弱な男ですが、私はそのことからとにかくもう自分の何かではなくなってしまったから、ありがたい。けれども、私は、

「人間小池というやつは、どうだ、こうだ」

と言われたら、私は弁護しません。私はダメな男だから。けれども、ダメであるけれども、そのダメでないもの、このキリストのものは、全世界が何と言うといえども、私はこれを否むわけにいかん。何となれば、これは天来の信の恵みの現実であるからであります。

西田先生の言葉を、せっかく京都に来たから、私は引用しようと思う。あの『無の自覚の限定』という中にこういう言葉がある。



「真の愛とは絶対の他に於て私を見るということではなければならぬ。そこには私が私自身に死することによって汝に於て生きるという意味がなければならぬ。自己自身の底に絶対の他を見ることによって、

即ち私の底に絶対なる他、キリストを見ることによって。「見る」というのはむしろ「宿す」ことによってです。

即ち汝を見ることによって、私が私であるという私の所謂絶対無の自覚いわゆると考えられるものは、その根底に於て愛の意味がなければならぬ。私はキリスト教に於てアガペと考えられるものがかかる意味があると思うのである。アガペは憧憬ではなくして犠牲である、神の愛であつて人間の愛ではない、神から人間へ下ることであつて人間から神へ上ることではない。」

と。正に然りです。その西田先生という哲人はやはり——禅宗の、今まで生きていらつしやる鈴木大拙先生と非常に親友だったらしいですが——禅の世界が深いと同時に、もちろん福音の世界もよく理解しておられたようです。

なお、こういう言葉もある。これは大いに私が普段思っていたことで、愉快なんです。文化というものは自己拡大の角度ですから、これはエロースの衝動ですね、プラトンが言つたとおり。

「唯、我々はエロースによつて神を見ようと思えるならば、それは全く東に行こうとして西に向うものと云わざるをえない。

そういつたいゆるる浪漫主義的な理想主義的な追求で神に至れるものではないと。

エロスによつてアガペが基礎付けられるのでなく、アガペによつてエロスが基礎付けられるのである。我々の文化と考えるものは宗教によつて基礎付けられこと

によつて真の文化の意義があるのである。」（岩波書店 西田幾多郎全集第六卷『無の

自覚的限定』「私と汝 四」）

と。私は普段これを本当に申しているんですが、西田先生がかく言っていて下さったことに気がついて本当に私は楽しい。本当にそうなんです。

そういった意味において、無即無限という意味の無でありまして、決して消極的な無ではない。ただし、人間の側においては、どこまでもこの無は即ち、自己に死すこと。大死一番というが、いわゆる悟つて大死一番ではない。大死一番は十字架で受けとっているから、大生している。大死は即ち大生している。無は即ち無限である。真に碎けて玉碎するなら、玉碎は即ち玉成するんです。玉と成る。

近頃、いろいろ日本語を制限しているようですが、漢字というのは非常に重宝で、非常に表現が豊かなのに、なぜ、日本人はこの素晴らしい国語をだんだん貧弱にするかと思つて、私は情けないと思う。あんな規格をつくつてしまつて。それは繁文縟礼な余計な精力はつかわなくていいですよ。けれども、必要なものは自由自在につかつたらいいいではないですか。



これははねる、あそこは止めるという、漢字を非常に難しく学んで、「きょう」というのは「けふ」と書くとか、そういうことはくだらないですよ。逆に余り制限して、おくりがなはどうだ、ふりがなはどうだなんて、今度は頭が痛くなってしまう。自然に任せておけばいいですよ。それはある程度の規格はいるでしょうけれどもね。

●空にして充満

さっきのルターの話にもどります。そういうわけで、

「本当の信仰とは神の業であつて、そして、神から生まれしめるものであつて、旧ふるきアダム即ち旧き我をすっかり殺してしまつて、全く別な人に変えてしまつて、その心も心情も思いもまたすべての人間の能力も新しくするものであつて、聖霊をここにもたらしめるものを真の信仰という。」

と、ルターが言っている。もちろん、旧きものはいつもかきふたのように付いてゴタゴタしてますよ、現実というものは。現実を割り切つてはいかん。人間というものを決して、「あの人の本質はこうだ」とか、そんな言い切れるものではない。いろいろな、人間というのは複雑な要素を持っていますから。そこに全く別なものが入つて来ているかどうか問題です。けれども、それはあなた方は心配することはない。

「あつ、私の中にキリストが入ってきました。これを逃したら大変だ」

と思つて、これを閉じたら、どういうことになるか。そんな閉じたような信仰だったら、キリストが窒息するですよ。しょつちゅう開いていてくれなければ。

だから、私しない世界だと言う。私は自分の中にキリストが居給うかどうかも知らんです、そんなことは意識的には。そんなことを意識したら、へんてこなことになる。知らんけれども、事実、そのような楽な、何だか知らんがという、そこに把とらえることができないものが実在していることを証言できるでしょう。常に開いている。

あの鯉のぼりはどうですか。あの鯉のぼりというのは、風がスースースー通っているから、これは動いているんですよ。これは袋になつてしまつたらダメでしょうが、閉じてしまつたら。

「あつ、風が入ってきた。この風を逃すまい」

なんて閉じてしまつたら、だんだんこれは下においてしまう。これはこちら（尾）が抜けている。私の身体をキリストがしょつちゅう抜けていてくださるから。入つては抜けているだから、キリストは言われた。

「お前の中に永遠の水をやるよ。渴かない水をやる」

と、あのサマリヤの女に、ヨハネ伝4章で言つておられる。

「この水が入ったならば、お前さんのお腹の中から泉となつて湧き出るよ」

と。これが永遠の生命の象徴、言葉なんです。即ち、生命は泉してやまない。キリストは



その中に入って流れてやまない。流れるから、また入ってやまない。そういった実存です。空にして充滿で、しかも流れているという。

私は「小池」というが、池ではダメですよ、淀^{よど}んでしまうから。腐^くってしまう。これは「小泉」と言わなくては。私は「小泉」と言いたいんだけど、それ(改姓)はややこしいらしいから、変えませんが。小池ではダメだよ」というわけで、私は小池という名字でしょうね。「辰雄」なんていうのもサタンみたいだ(笑)。「サタンに与^{くみ}してはいかんよ」というわけ。私は否定的な名前ですよ。「小池辰雄」なんてちつともいい名前ではない。これはマイナスの名前ですから。それで、私はどうしても天からプラスをいただかなければどうにもならん。

●キリストの本願の効力

そういう、福音の世界というのは、なんとまあ無色透明な、楽な、しかも充滿して自由なものでしょうか。カトリックは門を閉じているけれども、私はカトリックで門を開いているところがあれば、さつきといくらでも入って、「このキリストを」と言って証言しますよ。どこへ行ったって。何もこわいことはない。何となれば、このキリストの生命は真に愛の生命であるから。

「愛は一切に勝つ」(アモール・オムニア・ヴィンキット)

と言う。これはヒルティ先生の大好きな言葉です。彼の墓碑名に書いてある。この頃、白水社から『ヒルティ著作集』というのが出ているのを知っているでしょ。私は、自己宣伝ではないけれども、その中で訳もしております。このヒルティさんのものを学生の皆さんに本当に薦めたい——これは白水社に頼まれて、そんなことを言っているのではない——本当にそうです。まあ読んでごらん下さい。本当にその世界から、キリストの懐の中からのことを言っている。実は、「ヒルティの本質的なもの」という、書いたものがあるが、時間があれば読んであげた方がいい。あまり長くなるからよしますけれども。

「この世がどんなに欠けたものであっても、人がひとたびこの愛の世界に踏み入ったならば、キリストという愛の本体を受けとったならば、その世界に踏み入ったならば、どんなに欠けた世であっても、これは本当に豊かで美しいものとなる。それをそういうようにする。」

という、ヒルティの言葉がある。私は大好きな言葉です。回りがどんなに冷たくてもいいですよ。回りがどんなに暗くてもいいですよ。自分の中で光ってくださいるところの、このキリストという霊燈、霊の燈火^{ともしび}は、こないだの嵐が吹いてきたって、これは消えない燈火です。また、この光はどんな暗い所も照らすところの光である。

「汝らは世の光なり」

という。「なかなか、光になれません」ではない。なれっこないですよ。「光なり」ということは、



「私がお前の中に入って、光となるぞ」

ということですか。いいですか。キリストの言葉は、

「すべし、すべからず」

なんて書いてあっても、

「大丈夫、できるよ」

という裏付けをもつて響いてこなければ、これは本当に読めない。そういう読み方をしてください。それが本当に化体^{かたい}する読み方です。そういう世界に入っていく。祈りとは何かというと、そういうようにしてキリストを、言葉を化体して、受けとっていくことを本当の祈りという。

即ち、神の、キリストの本願の効力がここに成るんです。素晴らしい仏教に本当に実質を与えるものは、最後に福音がこの国において成る。どうか、右に左にどんな勢力があっても、びくともしないクリスチャンとなってください。不動心に——お不動さんというのがあっても——本当の不動心になる。それは決してこわばった不動心でも何でもありません。自由に自在であります。

そういったようなのがこの福音であるということに、皆さん、気がついてください。どうか、研究ではない。たくさん読む必要はない。

「我を食らえ、我を飲め。わが言は霊なり、生命なり」

と言われた。その角度でもってこれに食いついて、第一の糧はこの聖書である。これを枕として寝たつていい。

「人の子は、至るところ枕するところなし」

と言うが、「枕するところなし」という人は、至るところ何処^{いずこ}をも枕することのできる人です。舟板の上でも何でも、キリストは嵐の中でも眠っていた。舟がひっくり返りそうになったら、弟子があわてて起こしたけれども、「なんぞ、騒ぐか」と。キリストはちゃんと神の御腕に寝ている。

そういったところから、すべての皆さんの生涯の課題が、その人でなければならぬ仕事がある、無限の質をもつて展開していきます。完全性、無限性をもつて展開していきます。もはや、「何とか信仰」とか何とかという、そんなレッテルを貼った何ものでもない。この驚くべき無の実存にいいよ進展して、神の栄光、キリストの栄光を、真の真理を体現する人になってください。そうしたら、日本が本当に世界に最大の貢献をする唯だ一つの道はここにありと、私は信ずる者であります。

